1、現状の説明

(1)教育目標に沿った成果が上がっているか。

【短期大学全体】

短期大学での学習を総括するものとして、4 年制大学での卒業論文に相当する「卒業研究」(以下括弧を略す) を課している。卒業研究は、各学科で学修した力を総合的に駆使し、学生各自の課題に取り組むものである旨を、『履修要項』の教育課程の編成・実施方針に記述するとともに、第 2 学年には『卒業研究作成の手引　2014 年度』に「2 年間の授業の集大成として作成するもの」と明記している（資料 4(4)-1『履修要項 2014』pp.14-15、資料 4(4)-2『卒業研究作成の手引　2014 年度』)。ただし、『履修要項』では一覧表の一部として記述するにとどまり、目に留まりにくい。卒業研究の審査は、主査と副査の 2 名で担当している。これ以外には、学位授与の状況、就職や進学の状況、免許・資格の取得状況、留年率、授業評価アンケートや、2012 年度に開始した卒業生アンケート等で教育目標の達成状況を把握している。卒業生アンケートは、多様な視点から成果をはかる指標のひとつとして有効に機能している。

教育目標の成果には、数値として把握できるものと、数値化できないものがあるが、数値化は、対象とするものの持つさまざまな差異を切り捨てざるを得ない側面があり、加えて、人間を育てることに関しては、数値化が困難であるため、客観的かつ有効な指標はまだ開発していない。

【仏教科】

短期大学での学びの総括として課している卒業研究や「教師資格」(僧侶の資格) 取得を目的とする科目等履修生の「修了レポート」を、学科の全教員で指導し、冊子『仏教研究紀要』としてまとめている（資料 4(4)-3『仏教研究紀要』第 36 号)。具体的には、優秀な論文（3～5 名）を全文掲載するとともに、学生全員の研究要旨を掲載している。冊子は、卒業生、在学生に配布するほか、学内外に配布している。学生は冊子として多数の目に触れることから緊張感をもって取り組むことが期待できる。

卒業生の状況に関しては、以下のようになっている（資料 4(4)-4 本学 HP「卒業者数」)。

表 4(4)-1　卒業生の状況

	2011 年度			2012 年度			2013 年度		
	卒業予定者(A)	合格者(B)	合格率 (B/A)*100	卒業予定者(A)	合格者(B)	合格率 (B/A)*100	卒業予定者(A)	合格者(B)	合格率 (B/A)*100
仏教科	25	17	68.0%	24	23	95.8%	11	10	90.9%

【注】1 「卒業予定者」とは、毎年度 5 月 1 日における当該学科の最終学年に在籍する学生数を指す

2 「合格者」は実際に卒業した学生数を指す(前期卒業を含む)

卒業率（合格率）は、2011 年度 68.0%、2012 年度 96.8%、2013 年度は 90.9%であった。本学科の学生数が少数であることから、百分率では年度による変動が大きくなるが、

実際の人数でみれば、卒業できなかったものは、ここ 2 年間は 1 人だけでほぼ全員が卒業している。

本学科で取得できる資格は、図書館司書資格と真宗大谷派教師資格（僧侶の資格、以下「教師資格」と略す）である。特に本学科の特色である教師資格の取得者は、2012 年度 13 人、2013 年度 4 人であった（資料 4(4)-5「資格取得者一覧」）。2012 年度の卒業生は 23 人で、資格取得率は約 56%、2013 年度は 10 人の卒業生のうち 4 人で 40%となり、ここ 2 年を平均すると、ほぼ 2 人に 1 人は教師資格を取得したことになる。ちなみに資格を希望した者に関しては、2012 年度は全員、2013 年度は 6 人が希望し 4 人が取得している。

進路状況は、次の表のとおりである（資料 4(4)-6「卒業後の状況調査票」）。

表 4(4)-2　進路状況

	2011 年度			2012 年度			2013 年度		
	進学	就職	その他	進学	就職	その他	進学	就職	その他
仏教科	9	4	4	15	3	5	1	4	5

【注】　数値は次年度 5 月 1 日現在。

2011 年度の進学状況は、大学院 1 名の他は大学であるが、2012 年度は、専修学校等が含まれる。進学先のほとんどは、大谷大学文学部の真宗学科・仏教学科である。2 年間の学びで学問的関心が高まったという理由が大きいが、編入を目的として入学するケースも否定しきれない。2013 年度の進学は 1 人で、年度により変動が大きい。

就職には、僧侶資格を得て実家の寺院で僧侶となる場合が含まれ、本学科の特徴といえる。就職者全体に占める寺院関係への就職者は、2011 年度 4 人中 3 名、2012 年度は 3 人中 3 名、2013 年度は 4 人中 1 名となっている。真宗大谷派教師資格を取得する学生の実家は、ほとんど寺院である。本学科では、寺院後継者の育成という役割も担っているが、年度により変動はあるものの、その使命はおおむね果たせているものと考える。

なお「その他」には、進路が明確に把握できない者が含まれている。

2012 年度には卒業生アンケートを実施し回答を得た（資料 4(4)-7『大谷大学卒業生アンケート調査結果報告書』）。対象は 2009 年度から 2011 年度の卒業生 51 名であったが、有効回答数は 10 である。少数であるが、参考までに述べると、授業内容では、全員が「自分なりの考え方を深められる授業が多い」と回答があった。ほかの項目でも満足度の高い回答が寄せられた。「在学中身についた力や知識・技術」については、「幅広い視野や考え方」「さまざまな社会問題についての知識・理解」は高く評価されたが、反面「多様な集団・組織の中で人間関係を構築する力」や「社会や規範やルールを理解して行動する力」の評価は低い。学則や教育研究目的に示した相互に敬愛し合う社会の実現には、円滑な人間関係のもと社会規範に則った生活が必要であるが、その点で幾分の課題を残している。

【幼児教育保育科】

卒業研究では、教員一人当たり 9 名前後の学生を指導する（2014 年度）。卒業研究の審査は仏教科とは異なり、複数の教員による口頭試問の形はとっていない。卒業研究提出後に学科行事（幼教フェスティバル）を実施していることや、実習による欠時を補うための

補講の実施等などで試問のための時間を確保することが難しいことによる。口頭試問は実施していないが、主査はゼミの時間等で学生にコメントし、副査については卒業研究を精読し、学生に文書でコメントするという形で、審査及び学生へのフィードバックに配慮している。副査と主査は、お互いに必要があれば、卒業研究に関して協議し、場合によっては該当学生に質問するなど厳正に審査にあたっている。卒業研究提出後、学科の学生全員が参加する卒業研究発表会を実施する。また、全員が卒業研究の要約を作成し、『卒業研究』として冊子にまとめ、第 1、第 2 学年及び次年度の新入生全員に配布している（資料 4(4)-8『卒業研究』第 47 集（一部抜粋））。学生は自らの卒業研究の要旨が多数の学生に読まれるため、緊張感をもって取り組む効果が期待できるのは、仏教科と同様である。なお、優秀な卒業研究は、学科の発行する紀要に掲載する場合もある。

卒業の状況は以下のとおりである（資料 4(4)-4）。

表 4(4)-3　卒業生の状況

	2011 年度			2012 年度			2013 年度		
	卒業予定者(A)	合格者(B)	合格率(B/A)*100	卒業予定者(A)	合格者(B)	合格率(B/A)*100	卒業予定者(A)	合格者(B)	合格率(B/A)*100
幼児教育保育科	82	76	92.7%	85	81	95.3%	80	73	91.3%

【注】1「卒業予定者」とは、毎年度 5 月 1 日における当該学科の最終学年に在播する学生数を指す
2「合格者」は実際に卒業した学生数を指す(前期卒業を含む)

過去 3 カ年をみると、卒業予定者の 9 割以上が卒業しているが、合格率が 95%に達していない年度があり、十分満足すべき数字とはいえない。ただ、2010 年度をみると卒業予定者 80 名に対し、卒業した者は 76 名で 95%の割合であることから、年度によって 5%程度の変動があると推測できる。もちろん 100%に近づける努力はしなければならないが、今のところカリキュラム編成その他に特段の問題はないものと考えている。本学科では、幼稚園教員免許と保育士資格を取得し、保育者を養成することを大きな目的としている。ほとんどの学生は、幼稚園か保育園、あるいは養護施設への就職をめざして、幼稚園教諭二種免許と保育士資格を取得している。2012 年の取得者数は、両方とも 80 名であった。卒業生は 81 名なのでほぼ 100%の取得状況である。2013 年度は、卒業生 72 人のうち、幼稚園免許は 71 人、保育士資格は 70 人が取得しており、ほぼ 100%である（資料 4(4)-5）。近年保育職への就職条件として幼稚園免許と保育士資格を要求されることもあり、毎年ほとんどの学生は両方の免許を取得している。

進路状況は次のとおりである（資料 4(4)-6）

表 4(4)-4　幼児教育保育科　就職状況（2011 年度～2013 年度）

年度	進学	就職者数									その他
		全数	幼稚園		保育所		施設		その他		注 2
2011	5	63	17	27.0%	44	69.8%	1	1.6%	1	1.6%	8
2012	5	71	14	19.7%	52	73.2%	4	5.6%	1	1.4%	5
2013	1	65	16	24.6%	43	66.2%	3	4.6%	3	4.6%	7
計	11	199	47	23.6%	139	69.8%	8	4.0%	5	2.5%	20

【注】1　パーセンテージは就職者数に占める幼稚園等の割合（就職者÷就職者数）
　　2　その他には、一時的な仕事に就いたもの、進学・就職の準備中、他を含む

また、上記の表 4(4)-4 から求めた卒業生全体に対して保育職の占める割合（保育職への就職率）は下表のとおりである。

表 4(4)-5　卒業生の保育職への就職者の割合（2010 年度～2012 年度）

	保育職への就職者数	卒業生数	保育職への就職率
2011 年度	62	76	81.6%
2012 年度	70	81	86.4%
2013 年度	62	73	84.0%
計	194	230	84.3%

就職しなかったものには、進学やアルバイト等が含まれる。表が示すように卒業生の 8 割以上が保育職に就いており、2013 年度を例にとると、就職した者 65 人のうち 62 人が保育職（幼稚園・保育所・施設）に就いており、これは就職した者の約 95%に当たる。同様に 2012 年度、2011 年度をみても 98%以上である。このように就職する者のほとんどが保育職についており、本学科の保育者養成の使命は果たせている。

卒業生アンケート（本学科の標本数 65）では、在学中に受けた授業内容について、専門的な知識・技術が身につく、視野を広げられる、自分なりの考え方が深められる、主体的に学ぶ姿勢が身に付く、等の項目の評価が高い。在学中に身についた力として、「専門的な知識や技術」「目標の達成に向かってあきらめずに取り組み続ける力」「相手の状況や考え心情に配慮して行動しようという意識」等の評価が高い。しかし、一方では、「ストレスに対応し、自分の感情をコントロールする力」「生涯学び続けようとする姿勢」等の評価は低い。直接将来の職業（保育職）に関係が深いことがらは学べており評価も高いが、広い視野からの学習の意義等に関心が低い（資料 4(4)-7）。

毎年 12 月に「幼児教育フェスティバル」という名称の学科行事がある。第 2 学年を主体に、それまでの主に実技系統の学びを総括する意味で、公開でオペレッタや簡単な寸劇、演奏等を発表している。卒業研究が知識や考察力を評価するものとすれば、この行事は、技術や協同する力を必要とするため、コミュニケーション力をはじめ数値化の困難な要素を評価する機会となっている。

(2)教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

【短期大学全体】

教育成果についての短期大学部全体に共通する評価は、年 2 回実施する授業評価アンケートや学科ごとの GPA、4 年に一度実施している在学生の満足度アンケートの教育成果に関する部分等によっている（資料 4(4)-9『大谷大学・大谷大学短期大学部在学生満足度アンケート調査結果報告書（一部抜粋）』（2013 年度実施））。満足度アンケートは、要点をまとめたものを教員全員に配布する。なお、学生の満足度はかなり高い。授業評価アンケートは、学生の視点からの授業の成果を検証するものであるが、結果は、各教員に担当科目ごとに文書で通知するとともに、全体の状況は大谷大学と合わせて冊子にまとめ、学科主任に配布する。これらの結果をもとに、教育内容や方法の改善を図るべきであるが、短期大学全体として組織的に取り組むまでには至っていない。満足度アンケートに関してもほぼ同様である。授業評価アンケートや満足度アンケート、GPA の分析が、仏教科と幼児教育保育科とでは学生数や学科の性格が大きく異なっているため、課題を共有する視点をもつことが難しい。具体的な事柄に即した改善は、主に学科や担当教員に任すことになる。両学科とも学科会議等で個別の学生の情報を共有する機会を頻繁に持ち、個別学生への対応を通じて教育目標の達成にむけて指導するとともに、学科としてのカリキュラムの見直しや、授業内容の充実を検討している。

【仏教科】

基本的に、学生数が少数であることから、個々の学生の学修状況を学科会議で検討し、学力向上、及び資格のための方策を立てている。仏教科としての基礎力を充実させるために開講科目を検証するとともに、「真宗大谷派教師資格」に要求される授業内容の充実に努めている。その結果として、2013 年度より選択科目に新科目「大乗経典を読む」を開講した。社会的に要求される多様な真宗大谷派教師像を念頭におき「真宗大谷派教師資格」の授業内容の検討は、継続して行っている。

【幼児教育保育科】

学科の教員全員で担当する大学導入科目「学びの発見」は、全員で毎年見直しをはかり、学生の学修状況にあわせて改善を図っている。第 2 学年で実施する教育実習、保育実習は、免許・資格の課程では特に重要な意味を持つため、実習後には、前期後期各 1 度ずつ、小グループで第 2 学年が第 1 学年に実習を振り返って報告し、第 1 学年の質疑に答えるという「実習体験交流会」を実施している。第 1 学年は、第 2 学年の報告を受けて実習への準備を整えることになり、第 2 学年は、自らの実習を振り返る場となる。必要に応じ教員がアドバイスをする。

グランドデザインに基づく学科の目標として、学生の学力向上をはかるためにカリキュラムの検討をかかげたが、学習内容の接続性を学科教員全員で周知することで、担当科目の内容を充実させることの確認にとどまっている。また、学力向上のためには教員の授業力が必要であるとの認識から、授業力を高める方法の一つとして教員相互の授業見学を実施することを学科で了解した。授業公開は、FD 部会からも実施が要求されているが、学

科独自の部分を加え、授業公開の期間を設けないことや授業公開者へのコメントを可とする等、より充実したものをめざし 2013 年度 11 月より実施した。しかし、参加する教員は僅かで、予期したような成果は得られていない。このことの反省を踏まえ今後もより多くの教員が参観できるよう適切な方法を工夫し、授業力を高める方法を模索していく。

(3)学位授与（卒業認定）を適切に行っているか。

【短期大学全体】【仏教科】【幼児教育保育科】

学位授与（卒業認定）は、学則第 29 条に基づいて定められた「大谷大学短期大学部学位規程」に則って厳格に運用している（資料 4(4)-10「大谷大学短期大学部学位規程」）。なお、「目的」「教育目標及び教育方針」を『履修要項』に明示し、その中に「学位授与方針」等を示し、学生に周知している(資料 4(4)-1 pp.14-15)。卒業判定の教授会は、教務課の作成した 2 学科の全卒業予定学生個別の資料に基づき、厳正に審議している。

卒業を認定した者には、「仏教」・「幼児教育保育学」の各専攻分野名を付記した短期大学士の学位を授与している。

2、点検・評価

●基準 4（4）の充足状況

授業評価アンケート、卒業生アンケート、卒業研究の合格状況、卒業率、就職状況等を評価してみると、学科により多少の相違はあるものの、おおむね本学の教育目標を達成して卒業しているものと考えられる。FD 活動も短期大学全体としての組織的な取組が弱いものの、学科単位では全教員の意見交換が活発に行われ授業改善が図られている。学位授与は規程に基づき厳正に行われている。以上により本学の教育成果は基準をおおむね充足しているものと考える。しかし、学位授与方針に定めた能力が身についたかどうかを判定する評価指標の開発はまだこれからの課題である。

①効果が上がっている事項

仏教科では、学生の学修の充実をはかるため、2013 年度より選択科目「大乗経典を読む」を開講した(資料 4(4)-1 p.23)。

幼児教育保育科では、学生の自主性を重んじた舞台発表の「幼教フェスティバル」で実技系の学修を幼児向けのイベントとして具体化する経験を持つこと、第 2 学年が実習の体験を第 1 学年に語る「実習体験交流会」等の学科行事を通して実習の充実をはかっていること、また現場の卒業生から職場体験を聞く「現場体験を聞く会」等の催し、更には地域の子育て支援活動等を通じ保育者へのモチベーションを高める取組を充実させていること等から保育職への就職率が高い(資料 4(4)-11「あかちゃん　にこちゃん　サロン」チラシ、表 4(4)-4、表 4(4)-5）。

②改善すべき事項

短期大学の学修の集大成である卒業研究の位置づけが、全ての学生が十分了解できるよう、『履修要項』等にその重要性をわかりやすく明示する必要がある。

2 学科ともに卒業予定の学生に対する卒業した学生の割合は決して低くはないが満足できる状況ではないので、その割合を高めていくことが課題である。

3、将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

仏教科では、少人数であることを活かし、個々の学生の状況を把握しつつ、引き続き学科において必要な開講科目の検討等を行い、学生の学修の充実に努めていく。

幼児教育保育科では、学生の保育への実践的知識や保育者への意識向上のためにも、地域の子育て支援活動を教育研究支援課等とも連携しながら、充実させていく。

②改善すべき事項

卒業研究は、短期大学での学びの集大成に位置づけられるが、その重要性を『履修要項』などでアピールできるよう教務委員会等で検討する。

卒業予定者に対する卒業する者の割合を高めていくには、1 年次より課題をもつ学生の情報を教員相互が共有し、指導するという従来の在り方を一層強化するとともに、幼児教育保育科では、入学センター等と連携して、大学説明会等の機会に保育者養成という学科の特質を受験生に十分周知し、受験生と学科のミスマッチを減らすよう努力する。

4、根拠資料

資料 4(4)-1『履修要項 2014』（既出（4(1)-4））
資料 4(4)-2『卒業研究作成の手引　2014 年度』
資料 4(4)-3『仏教研究紀要』第 36 号　平成 26 年 3 月　仏教科発行
資料 4(4)-4 本学 HP「卒業者数」
http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq0000037uoe.pdf
資料 4(4)-5「資格取得者一覧」
資料 4(4)-6「卒業後の状況調査票」
資料 4(4)-7『大谷大学卒業生アンケート調査結果報告書』
資料 4(4)-8『卒業研究』第 47 集（一部抜粋）　平成 26 年 3 月　幼児教育保育科発行
資料 4(4)-9『大谷大学・大谷大学短期大学部在学生満足度アンケート調査結果報告書（一部抜粋）』（2013 年度実施）
資料 4(4)-10「大谷大学短期大学部学位規程」
資料 4(4)-11「あかちゃん　にこちゃん　サロン」チラシ